

ヒュームとエディンバラ大学道德哲学講座

田 中 秀 夫

1. 道德哲学講座の制度化

1745年にエディンバラ大学の道德哲学講座、正確には精神哲学および道德哲学講座（Pneumatics and Moral Philosophy）の教授人事が行われた。不世出の哲学者デイヴッド・ヒュームは候補となったものの、自身および関係者の期待もむなしく選考に漏れた。無名のクレグホーンという青年が教授に選ばれた。なぜそのような人事が起こったのか。それは今から振り返ると、極めて意外な醜聞めいた人事であるとしか言いようがない。それは、しかしながら、当時としては、奇異なことではなかったように思われる。世論が大騒ぎしたわけでもない。知的サークルでも、一部の支持者が憤るだけで、むしろヒュームの敗北を当然と見る向きが多かったように思われる。大著『人間本性論』（1739-40）によって、ヒュームは懐疑論者として悪名が高かったからである。

もしヒュームが採用されたとすれば、逆に大騒ぎになった可能性がある。道德哲学という人間形成にとってきわめて重要な講座を危険思想の持ち主に委ねることを意味したからである。しかしながら、すでに大学改革がなされ専門教授制が導入されていたエディンバラ大学において、実力からすれば最適任の候補が選に漏れた事実は無視しがたい。それはスコットランド啓蒙そのものの性質、能力、限界ともかかわるであろう。

エディンバラ大学は、スコットランドの4大学（アバディーンを2つと数えれば5大学）の

なかでは創設が最も遅かったが、教授制度への移行は他大学に先行して1708年に遂行された。そして同時に道德哲学講座が設けられた。改革は1703年に学長となったカーステアズ（William Carstares, 1649-1715）が遂行した。彼は大物政治家で長老派牧師でもあり、ウィリアム3世の盟友でスクアドロンであったが、カーステアズはオランダの大学ですでに実施されていた専門教授制度を導入したのである。

学問の拠点としての発展が期待されたエディンバラ大学の道德哲学講座が注目を集め、有名となるのは、その創設から半世紀以上たってから、すなわち、1764年にファーガスン（Adam Ferguson, 1764-1785）が就任して以後のことである。第三代アーガイル公爵の有能な腹心アンドルー・フレッチャー、ミルトン卿の恩顧によって、ファーガスンは1759年以来、彼には不似合いな自然哲学の講座に就いていたが、1764年に待望の道德哲学講座に移った。それを弟子のドゥゴールド・ステュアートが継承し、多数の学生をひきつける著名な確固たる代表的な講座にしたが、それは後の事である。エディンバラでの講座の担当者は、ウィリアム・ロー（William Law, 在任期間1708-29）、ウィリアム・スコット（William Scott, 在任期間1729-34）、ジョン・プリングル（John Pringle, 在任期間1734-45）、ウィリアム・クレグホーン（William Cleghorn, 在任期間1745-54）、ジェイムズ・バルフォー（James Balfour, 在任期間1754-64）となっている。ファーガスンは6代目となるが、それまで誰一人として学生をひき

つける講義もせず、著名な教授にもならなかった。ひとりひまたく講座を閑職として利用した。

少し遅れてグラスゴウ大学も1727年に教授制度に移行した。道徳哲学講座は、ガーシヨム・カーマイケル(Gershom Carmichael, 在任期間1727-29)からフランシス・ハチスン(Francis Hutcheson, 在任期間1729-46)、トマス・クレイギー(Thomas Craigie, 在任期間1746-51)、アダム・スミス(Adam Smith, 在任期間1752-64)、そしてトマス・リード(Thomas Reid, 在任期間1764-96)へと伝えられた。クレイギーは講義もしなければ、病気で早々に辞任し、人気の保養地リスボンに療養の旅に発った。それ以外の教授は充実した講義を行った。ハチスン、スミスの時代はとりわけ人気があり、地元スコットランドからは当然のことながら、アイルランド、イングランド、アメリカ、ロシアなどからも学生が集まり、輝かしい講座となった。ほぼ半世紀間、グラスゴウの道徳哲学講座は栄光を独占した。その間、エディンバラの道徳哲学講座は沈滞を続けた。もちろん、エディンバラは医学や法学では先進的であった。

ファーガソンの就任後のエディンバラの道徳哲学講座の人気上昇は、ちょうど1764年にスミスがグラスゴウ大学の道徳哲学講座を辞任したのと同時である。学生も少なくとも一部はグラスゴウからエディンバラへと移動したのだと思われる。おそらく地味なリードではスミスの人気を継承することができなかつたであろう。むしろスミスの学生は多かれ少なかれ、スミスの直系の弟子で1760年に法学教授となった改革派のミラー(John Millar, 1735-1801)の講義に出るようになったであろう。ミラー時代に法学講座はエディンバラ以上に人気を博し、エディンバラが優位性を取り戻すのは、哲学者ヒュームの甥が刑法の教授になってからである。

スコットランドの大学は次第に社会から評価

されるようになるとともに制度化が進み、諸分野で優秀な教授を多く擁することを目指すようになっていく。それぞれの大学にとって、また学生にとっても、どのような分野で傑出しており、どのような教授がいるかということが、従来以上に重要となりつつあった。アメリカ植民地ではスコットランドの学位が高く評価されるようになった。

スミス以後の3人に関して言うと、著作の影響は微妙であったように思われる。ファーガスンは匿名の小冊子こそ出していたけれども、本格的な著作は、1767年の『市民社会史論』までない。彼らはまた、1711年生まれヒュームより一回り若く、その分、時代に恵まれていた。

アダム・スミスと同じく1723年に生まれたファーガスンは、16歳でセント・アンドルーズ大学に進み、42年に学位をとって、牧師になる準備を始めつつエディンバラ大学に移った。エディンバラではやがて穏健派牧師となる神学生のサークルに加わり、ヒュー・ブレアやジョン・ヒューム、ウィリアム・ロバートスンたちと親交を温めた。ファーガスンは、暫時、第三代アーガイル公爵アイレイの片腕であったミルトン卿(愛国者アンドルー・フレッチャーの甥)の私設秘書となったあと、1745年から57年にかけて、新設のハイランド人の部隊である「ブラック・ウォッチ連隊」の従軍牧師を務めた。部隊はフランダースに駐留中のブリテン軍に組み込まれる予定であった。

ファーガスンは、1757年からヒュームの後任として弁護士会図書館の館員をしばらく務めたあと、57年から59年までビュート伯爵家の家庭教師を務めている。こうした関係から、ビュートの伯父第三代アーガイル公爵とその部下ミルトン卿の恩顧で、ファーガスンはエディンバラ大学の自然哲学教授に1759年に就任したが、自然神学ならいざ知らず、自然哲学教授というポストは少なからず無理があった。当時は無理な人事がしばしば行われた。当時の人事

は党派がらみ、利害がらみ、親類縁者がらみだった。

ファーガソンの『市民社会史論』(1767)は、ヒュームこそその出来栄えに不満を述べたが、内外の知的世界から大歓迎を受けた。1769年に刊行された『道徳哲学綱要』という小著も予想以上に歓迎された。こうしてファーガスンは有名教授として、次々に著作を出したが、講義はさほど熱心ではなく、在職したまま、チェスターフィールド家の旅行付添教師を受けたりした。ファーガソンの経歴は、一部ヒュームと似た点がある。

リードが『人間精神の研究』を出したのは1764年であるから、出版ではリードがファーガスンにも先行している。リードはハチスンやケイムズと同じ世代であるから、リードの出版は遅かった。ミラーが傑作『階級区分の起源』を出すのは1771年である。それでも全体としてファーガスンは人気を集め、ミラーもまた改革派教授として影響力があった。リードは充実した講義を行なった教授であるが、目立たなかった。しかし、弟子のなかからドゥゴールド・ステュアートが出たことは、幸運であったし、リードの影響力にとって重要である。

ヒュームがもし道徳哲学の教授となっていたら、どのような著作を残したか、興味なしとしない。おそらく年齢の若い学生たちのために、平易で体系的な道徳・社会哲学の書をはじめとして、多数の独創的な著作を書いたのではないと思われる。

2. クレグホーンとヒューム

ジョン・プリングルの後任人事において、ヒュームの競争相手となったクレグホーン(William Cleghorn, 1718-54)は、明らかにライヴァルといえるような人物ではなかった。なんら業績もなかった。他方、エディンバラ大学に学んだヒュームは、若き日の研鑽の成果を世

に問い、すでに20歳代の終わりに『人間本性論』(1739-40)を出し、『道徳政治論集』(1740-41)も刊行した天才として、スコットランドの代表的な思想家になっていた。教授人事は、市議会の管轄事項であった。もちろん、有力者の影響力が様々な人事を左右したことは言うまでもない。

業績を持った34歳のヒュームと比較すべくもないにもかかわらず、業績のない27歳のクレグホーンが教授に採用された。クレグホーンは、ファーガソンの友人で、ハチスンの「道徳感覚」を鋭く批判した。ファーガスンはクレグホーンから道徳哲学の諸問題を学んだ。彼は10年足らず在職して1754年に他界した。36歳であった。出版物はない模様であるが、1千頁の(半分は白紙の)講義ノートが残されている。講義ノートを調べたノップズによれば¹⁾、それは学生の筆記によるもので、1746年の12月から1747年4月28日までの講義のほぼ完璧な記録とのことである。ノップズによれば、ノートは彼の知性の独創性を示しており、したがって市議会の教授選考を擁護する証拠になりうるものだというが、どうだろうか。

ウィリアム・クレグホーン之父ヒュー・クレグホーンは裕福な醸造業者であった。母はジーン・ハミルトンと言ひ、牧師ウィリアム・ハミルトンの娘であった。ハミルトンは後にエディンバラ大学の神学教授、1730年には学長になった。ジーンは1718年にヒュー・クレグホーンと結婚した。ジーンの3人の兄弟はエディンバラの名士であった。そのうちのロバート・ハミルトンとギルバート・ハミルトンは牧師となり、ロバートは1754年にエディンバラ大学の神学教授になっている。ロバートが講座に関するエディンバラの聖職者の声のなかで重要な役割を

1) Douglas Nobbs, "The Political Ideas of William Cleghorn, Hume's Academic Rival", *Journal of the History of Ideas*, Vol. 26, No. 4, 1965, pp. 575-586.

果たしたことは間違いない。またギルバートはウィリアム・クレグホーンと特別に親しかった模様である。三人目の兄弟のガヴィン・ハミルトン (Gavin Hamilton) は、エディンバラで書籍商を営む傍ら、市議会の議員であった。彼はポータス暴動と1745年の若僧称王の軍のエディンバラ占領において際立った功績があったために、地方政治で大きな発言権を持っていた。そういうわけでガヴィンはウィリアムの教授選考においても、またウィリアムの死後の人事において、自らの義兄弟であるバルフォーを採用した件でも大きな影響力を発揮した²⁾。

クレグホーンは1731年から33年にかけて人文学 (ラテン語) の授業に出ていた。34年には論理学の授業に出て、その後おそらく神学生となったが、教会にポストは得られなかった。1739年に人文学修士の学位請求者5名のひとりとなり、公開討論に参加した。39年から40年にかけて、彼はディーンのヘンリ・ニスベット卿 (Sir Henry Nisbet of Dean) の家庭教師になった。サー・ジョン・プリングルがフランダースに従軍することになって、「精神哲学と道徳哲学」の教授がいなくなったので、評議会は、1742年と44年の授業を行うためにウィリアム・クレグホーンとジョージ・ミューヘッド (George Muirhead) を授業担当者に任命した。この措置を是としたプリングルはブリュッセルから市議会に手紙を書いて、授業で使用するように自分の論稿を彼らに委ねておいたと説明している³⁾。クレグホーンがプリングルの代講者として3年間講義を行なったことは、モスナーも記している⁴⁾が、プリングルの講義ノートを用いたのかどうか、定かではない。

ノブズの調べたところでは、1745年のジャ

コバイトの乱に際しては、クレグホーンはエディンバラ防衛隊の志願兵となって活躍したし、教授としては学生に影響力があつたといわれている。しかし、かれは「エディンバラ大学討論協会」に加わっているだけで他の社交団体、協会などには加わっていない。クレグホーンは10年ほど在職しており、その間に講義を行なった模様であるが、残された資料はノブズが発掘した講義ノートしかない。クレグホーンは、1754年に療養のためにリスボンに滞在したが、エディンバラに戻ってすぐに亡くなった。

ファーガスンはクレグホーンについて常に好意的に語っている。サー・ウィリアム・パルトニとアンドルー・ステュアートは彼の講義は優れており、あらゆる年齢の人々、最も自由な職業の人々が参加していたと証言している。こうした証言と資料から推測するに、クレグホーンは教授としては職務をまっとうに遂行したように思われる。在職10年で著書を出版できなかったのは、当時としては、特に異常ではない。アダム・スミスにしても1751年に教授になってから8年後の1759年後に『道徳感情論』を出したに過ぎない。

講義ノート进行分析してノブズは、クレグホーンを古典共和主義者として評価している。講義ノートの彼の分析は、そのような解釈が正しいことを示している。

ヒュームを退け、無名のクレグホーンを採用するという人事がいかにして行われたのかについて、こうした背景を探ってくれば、おぼろげながら輪郭は見えてくるように思われる。もちろん、後世から見れば、ヒュームという天才にポストを与えなかったのであるから、これは明らかに異常な人事である。しかし、実情を調べれば、そしてヒュームと比べなければ、クレグホーンも教授になっても特段おかしくなかった。

前述のようなガヴィン・ハミルトンの市議会での発言権とハミルトン家とエディンバラ大学

2) Nobbs, *op. cit.*, pp. 575-76.

3) Nobbs, p. 577.

4) Mossner, *The Life of David Hume*, 2nd ed., Oxford, 1980, p. 156, 161

の深い関係が、おそらく直接的には決定的な決め手となったと思われるが、その背後には様々な遠因、構造的要素と偶然の諸要因が絡んでいたように思われる。

広い視野から問題を眺めると、結局はヒュームの思想傾向が最大の障害になったということのように思われる。おそらく、このエディンバラ大学の道徳哲学講座の人事において決定的な要因となったものは、ヒュームの天才の可能性と思想的急進性の危険性のトータルな評価とクレグホーンの凡庸さの比較に行き着く。もしヒュームの思想に過激な懐疑論の疑いさえなければ、ハミルトン家と言えども、ヒュームを退ける手を打つことはできなかったのではないかと推察されるのである。

ヒュームは啓蒙を推進した多くの穏健派知識人を友人としてもっていたし、啓蒙思想を共有した開明派知的エリートが政治の実権を握るといふ当時の世界では稀有の、例外的な国にいたけれども、専門職の地位には必ずしも恵まれず、期待もむなしくエディンバラ大学にも、さらに後になるがグラスゴウ大学にもポストを得ることができなかった。それは今述べたようにヒュームの無神論を疑われるほどの急進的な懐疑主義哲学に理由があった。

3. 党派抗争と人事—スクアドロンとアーガテリアン

スコットランドではおよそ1714年以来、競い合う二党派、「スクアドロン」（騎兵隊を意味する）と「アーガテリアン」（アーガイル派）が権力争いを繰り返して、どちらかが支配していた。共にウィッグであったけれども、この二党派の基盤と指導者はまったく異なっていた。

「スクアドロン」は初代モントローズ公爵（1714-15）からロックスバラ公爵（1716-25）トウイードデール侯爵（およそ1740-46）へと主導権が伝えられた。この3人の時期（1714年

から25年の10年余りと、1740年から46年までの6年間）にスクアドロンは権力とパトロネジ（恩顧）を握っていた。

スクアドロンの支持者には、アバディーン、エロール、フィンドレイター、シーフィールド、クローフォード、ローズ、ホープタウン、マーチモント、ステアなどの伯爵、アババスノット子爵、その他の弱小貴族と地主がいた。ジェントリからこの党派の運営者が出ており、彼らは通常は広大な土地を持った法曹であって、ゴースリーのマンゴ・グラハム、アーニストンのロバート・ダンダス、ロバート・スコット、サールストンのアンドルー・ミッチェル、ハンティントンのトマス・ヘイ、キルグラストンのロバート・クレイギーなどである。この党派の紐帯は血縁でもあれば思想でもあり、また官職への欲望でもあれば原理でもあった。地理的には西部のグラスゴウとダンバートンシャーから中央ベルト地帯を通ってロージアン、リンリスゴウ、ファイフそしてボーダー地方に渡っている。アバディーンから若干が加わった外にはハイランド出身者はほとんどいない⁵⁾。

1725年までのスクアドロン支配下においては、恩顧授与はエディンバラ大学の学長となっていたウィリアム・カーステアズに委ねられていた。オランダに在って当地の宗教と教育の先進性を学んだウィリアムの忠臣として教会の改革を進めたカーステアズは、大学改革にも乗り出し、1708年にエディンバラ大学に教授制度を導入すると共に、道徳哲学講座を設けるなどの改革を行なったことは、先に述べた通りである。

一方、アーガイル派はおよそ1705年から1738年にかけて、ジョン・キャンベル、第二代

5) 以上, Roger Emerson, "The "Affair" at Edinburgh and "Project" at Glasgow: the Politics of Hume's Attempt to become a Professor", *Hume and Hume Connections*, eds. by M. A. Stewart and John P. Wright, The Pennsylvania State University Press, 1994, pp. (1)-2.

アーガイル公爵に率いられた。1738年に公爵はウォルポール内閣と対立した。この期間のアーガイル派を取りまとめたのは公爵の弟のアーチボールド・キャンベル、アイレイ伯爵であった。アイレイには、1724年以後、エディンバラの副官、高等民事裁判所と高等刑事裁判所の裁判官のミルトン卿（愛国者フレッチャーの甥）が首尾よく仕えた。1738年に、兄を嫌っていたアイレイはウォルポールを支持し、アーガイル派を引き継いだ。

1742年のウォルポールの没落後、兄弟は統治に復帰したが、アイレイは国王の恩顧授与権を失い、他の権限も失った。しかし、1743年に兄が他界し、アイレイはアーガイルの所領と称号を継承することによって巨大な実力を得た。所領はグラスゴウからキンタイア半島を経てウェスター・ロス、ヘブリディーズ諸島にまで及んでいた。彼らに友好的だったのは若干のジャコバイト地主と多くの有能なウィッグ地主紳士、カローデンのダンカン・フォーブズ、ティンワルドのチャールズ・アースキン、ミントのギルバート・エリオット、およびケイズのヘンリ・ヒューム（ケイズ卿）のような1740年代までに法曹となった多くの優秀な若者であった。

さらにアーガイル派にはスコットランドを代表する知識人がいる。コリン・マクローリン、ロバート・シムスン、大多数の医者、デイヴィッド・ヒュームとウィリアム・ロバートソンを中心とするエディンバラの知識人たち、アイレイの死までの時期に教授になった多数派がそうである。

けれども、スクアドロンに属した知識人もいる。ジョージ・ターンブル、ジェイムズ・トムスン、トバイアス・スモレットなどであるが、彼らはロンドンかイングランドの他の場所に住んでいた。有名な思想家でスコットランドにいたのはロバート・ウォレスだけである⁶⁾。したがって、大半の思想家、教授、法曹はアーガイル派であった。スクアドロンになった思想家が

ほとんどいなかったのはなぜか。両派はともにウィッグであり、政治思想において大差ないとすれば、結局は、アーガイル公爵とその腹心が自由主義的改革派で、寛容で、より進んだ啓蒙派であったことが支持された理由ではないかと思われる。

啓蒙の時代がすでに始まっていたとしても、スコットランド啓蒙は、ウィッグ長老派が主導する思想の新動向としてみると、カーステアズ自身によって加速された側面がある。自らは啓蒙の著作を残さなかったけれども、ウィリアム国王や他の亡命ウィッグ政治家たちとともに帰国し、国王と名誉革命政権に仕えたカーステアズ自身が、オランダの初期啓蒙をスコットランドに持ち込んだと言えるであろう。カーステアズがスクアドロンであったのはたまたまであって、彼の登場はまだアーガイルが実権を握る以前であった。

オランダからの帰国者は、イングランドにおいてもスコットランドにおいても、名誉革命の遂行において大きな影響力を持っていた。ジャコバイトと戦った名誉革命コネクションとして両国のウィッグは、やがて合邦を推進する基盤ともなった。ジョン・ロックはイングランドの名誉革命政権に加わり、『人間知性論』（1690）、『統治論』（1689）、『寛容書簡』（1689）、『教育論』（1693）、『利子貨幣論』（1695）などの問題を次々と執筆・刊行するとともに、通商・植民政策等の立案を推進した。革命以前にはサルトーンの牧師をし、アンドルー・フレッチャーの家庭教師も努め、グラスゴウ大学の神学教授職にもあったギルバート・バーネット（Gilbert Burnet, 1643-1715）は、ジャコバイトと戦うべく名誉革命にコミットし、オランダから帰国後、ソールズベリーの主教に任命された。彼は『ハミルトン公爵家の備忘録』（1676）、『宗教改革史』（1679, 1681, 1714）、『同時代史』（1723-34）

6) Emerson, *op. cit.*, p. 2.

などを残した。

スクアドロンの支配は、しかしながら今述べたように1725年に終焉し、代わって第二代アーガイル公爵の率いる一派（アーガイル派）に支配権が移った。その忠臣としてはダンカン・フォーブズ（Duncan Forbes, 1685-1747）⁷⁾が有名である。これはウィッグのなかでの権力の移行であった。公爵亡き後、1728年からは、弟の第三代アーガイル公爵アイレイが、ウォルポールの盟友となってスコットランドの統治権をその手に掌握し、忠臣アンドルー・フレッチャー、ミルトン卿を通じてパトロネジを行使した。アイレイは1742年にウォルポールの失脚によって、いったんは権力を失うが、1746年に再び権力の座に復帰し、以後1765年までスコットランドの最高権力者の地位にあつて、改革を進めた。第三代アーガイル公爵こそ、スコットランド啓蒙の最大のパトロンであった。「だれかがスコットランド啓蒙の父だとすれば、第三代アーガイル公爵こそその称号に相応しい」とエマースンは述べているが、そのような一面があることは否定すべくもない⁸⁾。

その後、1766年から1778年まではどの派も支配権を握ることができず、国王の恩顧は、多

くの集団と人々によって配分された。そのなかで、この時期に最も有力となった一派は穏健派知識人であった。有力になったとはいえ、彼らは教区と大学の恩顧以外には関心を持たず、議会政治にもコミットしなかったが、大学の人事には影響力を持っていた。穏健派知識人をスコットランド啓蒙の中核に置いた研究がシャーによって遂行された⁹⁾。法曹と公職への啓蒙の影響はシャーの穏健派啓蒙研究では、それがいかに優れた研究であるとしても、十分に把握されたとは言いがたく、アーガイル、ミルトン卿、ケイムズ卿をもっと重視する枠組みが必要であろう。啓蒙為政者が果たした役割は大きかった。

スコットランド啓蒙のなかで育ったヒュームは、アーガイル派ではあつたが、しかしながら、第三代アーガイル公爵とその忠臣ミルトン卿に見出されなかった。エディンバラ大学の教授人事は市議会（local town council）の管轄権に属していた。市議会は商人と手工業者の寡頭制的支配下にあつた。市議会には第3代アーガイル公爵アイレイや、スコットランド教会、エディンバラ大学長（1745年にはアーガイル派のウィリアム・ウィシャート）、あるいは市長（1745年にはヒュームの友人の、アーガイル派の、アーチボールド・ステュアート）が影響力を持っていた。

市長は1742年に選挙で選ばれたアーガイル派のクーツ（Coutts）から44年にはクーツの庇護を受けたアーチボールド・ステュアートに交

7) 同名の議員（合邦以前のスコットランド議会の）を務めたフォーブズの息子。父は、名誉革命を支持したが、彼のカロードンの所領はジャコバイトに破壊された。息子のフォーブズは法曹としてミッドロージアン治安判事を振り出しに、1725年に法務長官（Lord Advocate）、1737年には高等民事裁判所長官（Lord President）まで務めた。1715年のジャコバイトの乱では政府を支持して活躍したが、イングランドでジャコバイト貴族の裁判を行なうことには反対した。高等民事裁判所の改革を推進し、ショーフィールド暴動（Shawfield Riot）、ポータス暴動（Porteous Riot）、そして45年のジャコバイトの乱（Forty-Five）で政府に貢献した。しかし、つねにスコットランドの利益を忘れなかった。アーガイル公爵に所領でのタックスメン（借地人）の廃止を忠告した。

8) Roger Emerson, "The contexts of the Scottish Enlightenment," in *The Cambridge Companion to the Scottish Enlightenment*, ed. by Alexander Broadie, Cambridge U. P., 2003, p. 16.

9) Richard Sher, *Church and Universities in the Scottish Enlightenment*, Edinburgh, 1985.

10) Roger Emerson, *Professors, Patronage, and Politics: The Aberdeen Universities in the Eighteenth Century*, Aberdeen U. P. 1992, pp. 5-6.

替していた。彼らは共に元はアイレイより第二代アーガイル公爵により親密であったが、1743年に第二代が亡くなってからはアイレイ派となった¹¹⁾。1744年にヒュームを推薦したのはクーツである。ヒュームは友人のクーツとA・ステュアートだけを頼みとできたが、この二人は必ずしもアーガイル公爵の寵臣ではなかった。またヒュームはアーガイルに好かれるタイプでもなかった。

アーガイルとミルトンが評価したのは、エマースンが述べているように¹²⁾、自分に似たタイプであった。「実践的改良家、技術と技術論に関心のある人物、化学者、植物学者、医者、自然哲学者、数学者、科学者、銀行家、穏健派牧師」である。この時点でヒュームがこの範疇に入っていると彼らが考えたかどうか疑わしい。ヒュームは銀行業、経済政策、政治ではアーガイル、ミルトンと共通の関心を持っていたが、しかしヒュームは重商主義、紙幣、経済への国家介入、近隣貧困化政策に反対であった。彼らは政治を熟知していたが、自由と徳へのヒュームの関心を欠いていた。ヒュームは1742年にウォルポールを批判して「有徳でなく」、権力掌握に関して「公正でなく」、「自由」の友でも「学問」の友でもないとしたが、それはウォルポールの盟友であったアーガイル公爵やミルトン卿についてのヒュームの判断でもあったかもしれない。

ヒューム自身もこの時期まで、アーガイル公爵の恩顧を求めて直接に行動することはなかった。「自由」と「徳」を重視したヒュームのような思想家にとって、なりふり構わず自ら権力者に擦り寄ることはできなかつたであろう。ヒュームが著作をアーガイル公爵に贈るのは1748年になってからである。

11) Emerson, "The 'Affair' at Edinburgh and 'Project' at Glasgow", *op. cit.*, p. 4.

12) Emerson, *ibid.*, pp. 6-7.

結局のところ、こうした関係者がどのような行動をし、どのような影響力を振るうかによって、また市議会の思惑、血縁関係、党派的・政治的關係などの要因によって人事は決定されたのである。その結果、デイヴィッド・ヒュームのような輝かしい哲学者が選ばれないという事態も生じたのである¹³⁾。

少なくとも1744-45年のエディンバラ大学の道徳哲学教授人事においては、アーガイル派は基本的にヒュームを支持したが、この時期数年間(1740年から46年にかけて)は、スクアドロンが権力を掌握していた時期であったことがヒュームには災いした。市議会の人事権もスクアドロンの影響下にあったから、事実上彼らの党派によって講座の人事が支配されており、彼らはヒュームに反対であった。したがって、モスナーもプライスもこうした党派対立という政治的要因でヒュームの教授人事の敗北を説明しているが、それは何ら不思議ではない¹⁴⁾。しかしながら、それが唯一の要因だったわけではない。

4. ウィッグ長老派のイデオロギー

そもそもアーガイル派は、一致してヒュームを推したというわけでもなかった。たとえば、学長ウィシャートはアーガイル派であったけれども、ヒュームに反対した。さらに、アーガイル派と見なされるグラスゴウ大学の教授ハチスンもリーチマンも反対した。グラスゴウ大学の教授がどの程度影響力を持ちえたかについては

13) Richard B. Sher, "Professors of Virtue: the Edinburgh Chair", in *Studies in the Philosophy of the Scottish Enlightenment*, ed. by M. A. Stewart, Oxford: Clarendon Press, 1990, p. 89.

14) E. C. Mossner and J. V. Price, Introduction to *A Letter from a Gentleman to his Friend in Edinburgh*, [1745] (Edinburgh, 1967), pp. vii-xxv. Mossner, *Life*.

疑問の余地があるが、彼らは穏健派牧師でもあったから、教会を通じて影響力を持っていたであろう。とりわけハチスンはその有力なイデオロギーとなっていたウィッグ長老派の思想を代表する道徳哲学者として広範な影響力があった。いずれにせよ、人事は政治的要因、党派性だけでは決まらなかった。もっと複雑な要因が絡んでいたと言わなければならない¹⁵⁾。彼らもヒュームの急進的な懐疑論に不安を持っていたのである。ヒュームが排除されたのは、このように、最終的には彼の思想的急進性による。

ケイズ卿も2、3の著作を世に出していたものの、まだこの時期には影響力を持てないでいた。ケイズが出世するのは、ジャコバイトの最後の反乱の数年後である。1720年代の終わりから30年代にかけて、1712年の牧師任命権法によって、国王と不在地主の権限が強められ、結果として教区は穏健派が次第に勢力を増していったが、そうは言うものの、盟約者の伝統を引く長老派のなかでは、牧師任命権法に反対した正統派（民衆派）の勢力も依然として強く、仮に関係者の構想のなかにあったとしても、おそらくヒュームに大学のポストを与えるといった恩顧授与は現実に実行できる状況ではなかった。

流神の咎によるトマス・エイケンヘッドの処刑は1697年のことに過ぎなかったから、熱狂と狂信はいつ猛威を振るうとも限らなかった。エディンバラの道徳哲学講座人事には、ハチスンが反対に回った。グラスゴウ大学道徳哲学教授のハチスンはスミスの師であり、スコットランド啓蒙はハチスン抜きでも考えがたいが、ハチスンは微妙な判断をしている。穏健派の嚆矢の一人とされるハチスンは福音主義者の主張す

る民衆の牧師選任権を退けたが、同時にまた牧師任命権法がジェントリによる教区牧師の選任権という共和主義的自治の伝統を解体するものだと、それに反対した。チャーフツベリ派の啓蒙思想はスコットランドの上流階級と知的エリートの好むものとなったが、自治の思想としての共和主義も知的エリートの思想として独自の発展を遂げていた。

いまだ穏健主義と文明化、世俗化は必ずしもスコットランドの民衆に歓迎されたとは言えず、民衆は上流階級と知的エリートたちのパトロネジを介して成長しつつあった世俗的文化・奢侈・洗練・社交的世界に、欲望と権力に溺れた腐敗・墮落を嗅ぎ取って、反発と拒絶、抵抗を示した。意外にも、貧困にあえぎながらも民衆はかえって精神主義的伝統に固執する傾向があった。1740年代（1742年）には、グラスゴウ近隣のキャンバスラングで、伝道師ホイットフィールドの説教をきっかけとして、福音主義的な熱狂的信仰回復運動が巻き起こる。それはアメリカ植民地でのジョナサン・エドワーズの信仰回復運動と連動していた。民衆の熱狂的な信仰心こそ、スコットランドの正統派長老主義を依然として支える基盤であった。

したがって、啓蒙が市議会の議員のような商工業階級、中間層に浸透することも困難なら、より下層も含む民衆に受け入れられることも容易ではなかった。民衆にとって上流階級は仲間ではなかった。仰ぎ見る別世界の人間であった。知的エリートにしてもそうである。そして上流文化は華やかでありつつも悪徳にまみれているのではないかというのが、啓蒙を拒否しようとした民衆派の疑念であった。穏健派は、悪徳に耽ることを自らに禁じつつも、洗練と社交の啓蒙文化を支持し、穏健な啓蒙文化こそ人間愛に相応しい文化であることを世の中に説得しようと努めた。道徳的に廉潔な啓蒙文化と腐敗墮落した上流社会の文化との差異はおそらく紙一重であった。権力者の恩顧によって運命、境

15) Richard B. Sher, "Professors of Virtue.: the Edinburgh Chair", M. A. Stewart, *Studies in the Philosophy of the Scottish Enlightenment*, Oxford: Clarendon Press, 1990, pp. 105-106.

遇が180度変わるという世の中は腐敗しているというほかにないであろう。恩顧によって年金が支給される社会というのは、本当に能力本位の社会だろうか。恩顧には党派性が付いて回ったから、余計に腐敗の疑いがあった。

アダム・スミスが『道徳感情論』で、上流階級に対して媚び諂う民衆の道徳感情の腐敗を指弾したことが想起される。上流階級や知的エリートの傲慢も厳しくとがめたスミスは、上流階級の権勢を、運勢(Fortune)に帰すのではなく、彼らの能力と徳の成果だと錯覚する民衆の愚かさにも注意を向けていた。パトロネジによって人々の運命が左右される階級社会に自身も巻き込まれていたスミスは、自然的自由の社

会、すなわち能力本位の社会、自由競争社会を理想社会と見ていた。そのスミスも、グラスゴウ大学の教授を10年余り努めた後、1764年に41歳ほどで退職して、バックルー公爵と共に大陸に旅行をし、その功績で(どんな功績?)高額の終身年金をパトロンから受け取った。啓蒙思想家を取り巻く社会はそのような社会であった。

エディンバラ大学の道徳哲学教授を逃したヒュームは、法曹図書館の館長となる。その後、コンウェイ将軍や、ハーフォード卿のパトロネジを得て、ヒュームは広い世界に出て行くことになる。その経験は、やがて社会認識の深化に繋がっていくことになる。